

芸術の起源は労働であるか：「労働起源説」への再検討

任, 潔
中国・浙江大学外国語学院：副研究員

<https://doi.org/10.15017/7181943>

出版情報：九大日文．42，pp.35-43，2023-10-01．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：



◎コラム

芸術の起源は労働であるか

―「労働起源説」への再検討―

任 潔

改革開放政策が実施されて以降、中国学術界では西方からの文学理論と批評方法を積極的に吸収する態度が見られ、外来の文学理論が共存する状態にある。しかし、西方からの文学理論と批評方法の影響の下で、中国における文学批評は文学から遠く離れ、理論コンプレックス (Theoretical Complex)、命題コンプレックス (Predicated Complex)、術語コンプレックス (Term Complex) の傾向が著しくなっている。こうした学術的ないし時代背景のなか、二〇〇四年十月、文学倫理学批評が中国の学者・聶珍釗氏によって提唱された。

その後十年の間に著しい発展を遂げ、また世界各国から多数の学者が参加することでさらに発展・国際化していき、現在は国際学術界でも広く認められている。二〇一二年には国際文学倫理学批評研究会 (IAELC) が設立され、これまでに中国・上海 (二〇一四年)、韓国・ソウル (二〇一五年)、イギリス・ロンドン (二〇一六年)、エストニア・タルトゥ (二〇一七年) で年次学会及び国際学術研究討論会が開催された。そして二〇一八年、第八回国際文学倫理学批評研究会年会及び国際シンポジウムが日本 (七月二十七日～三十日、北九州国際会議場) で開催されること

になった。それをきっかけに、文学倫理学批評の影響力は日本学術界にまで広がっていった。九州大学の波瀾剛氏、福岡大学の大嶋仁氏をはじめとする学者たちは、文学倫理学批評を日本文学研究に適用する可能性を探索すべく、優れた研究を展開してきた。

文学倫理学批評とは、倫理の視点から文学を分析・解釈・鑑賞し、文学の倫理的価値と教化的機能を汲みとる批評方法である。文学倫理学批評の立場からみると、文学とは道德の産物であり、人類がある特定の歴史段階で倫理を表現するために用いる形式の一つである。文学は、本質的に、倫理の芸術なのである。人類は倫理を表すために文字を作り出し、その文字を使って日常生活および人類自身の倫理に対する理解を記した。こうしてテキストが生まれ、最初の文学が誕生した。文学の役割は、まさにこのような倫理関係と道德秩序の変化、およびその変化がもたらした問題を記し、人類文明の進歩のための経験と教訓を残すことである。

しかし、文学倫理学批評が世界中に広がっていく過程で、「文学は、道德の産物・倫理の芸術である」という基本的観点に対して、日本をはじめとする各国の学者らが続々と疑問を呈している。確かに、日本文学史上における代表的な作品は多少とも倫理的な要素を含んでおり、それは文学倫理学批評によって日本文学を分析する前提となる。とはいえ、「文学＝道德の産物・倫理の芸術」と判断するわけにはいかないことは明らかである。文学倫理学批評の有効性を論証するためには、ひとまず文学を

含む文芸の起源について検討する必要があるだろう。つまり、文学は一体どこから生まれてきたのかという問い、またその発生メカニズムを究明しなければならない。

一、中国における「労働説」への受容

芸術の起源については先学の諸説が存在する。例えば「模倣説」^①「遊戯説」^②「巫術説」^③など、いくつかの見解がある。また、日本の民俗学者・折口信夫は、「自然な動機が、律文の発生を促し」、それを「かみごと（神語）」にあると信じて居る」^④と述べ、神の呪言が文学の発生であるという「信仰起源説」を唱えた。^⑤一方、中国においては、「芸術の起源は労働である」という「労働説」が最も広く認められている。一九三〇年、魯迅はプレハーノフの『芸術論』を翻訳し、その序言に「労働説」の観点を紹介した。また「門外文談」では、「私たちの祖先である原始人はもともと話もできない。共同で労働するためには、意見を表明しなければならぬ。それで、複雑な声音が徐々に鍛えられてきた。みなで一緒に木を担ぐ時、疲れて無理を感じる。その時突然、そのうちの一人が『よいしょ、よいしょ』と叫んだ。これは創作である」^⑥と指摘した。その後、「労働説」は次第に中国文芸理論界における主流の観点となってきた。二十世紀は八十年代に入ると、「労働説」についての議論に対する批判の声も聞こえてきた。姜慶国は『復旦大学学报』に論文『「芸術の起源は労働である」への質疑』を発表し、「労働

説は、ダーウィン進化論を芸術の起源研究に取り入れることを拒否する。これは論議の余地がある」^⑦と疑問を呈した。さらに、論文『芸術起源の歴史的なプロセス…「芸術の起源は労働である」への質疑二』では、『「芸術の起源は労働である」は社会的な要素を強調する一方で、自然的な要素を否定した」^⑧と主張した。その後、高玉は「労働説は労働を芸術の起源としたが、これはきわめて人文的な観点であり、科学的な根拠がない」^⑨と批判した。このように、「労働説」で芸術の起源を解釈するその合理性を疑う声が高まってきた。

芸術と労働の関係はさておき、「芸術の起源は労働である」という観点がどこに由来しているのか、まずこの点に注意を払う必要があるだろう。趙連元は「マルクスとエンゲルスは弁証唯物主義と歴史唯物主義を用い、考古学や人類学、生物学、美学、史前芸術学の研究成果を吸収し、科学的に文芸の起源を分析した」と指摘した。そして「文芸の起源が物質生産労働である」という観点は、19世紀にマルクスとエンゲルスが言い始めた」^⑩と推論した。しかし、マルクスとエンゲルスの芸術に関する論述を調べると、「芸術の起源は労働である」と直接に論断したことがないことが分かる。本稿では、「芸術の起源は労働である」という考えはマルクスとエンゲルスの著作を誤読した結果であり、マルクスとエンゲルスの観点によりながら学者たちが自分なりに推理し、帰納したものにはすぎないと主張する。マルクスの『経済学・哲学手稿』とエンゲルスの『弁証法』を総合してみると「芸術の起源は労働である」という観点が容易に

得られると述べる学者もいる。⁽¹⁾それゆえ、芸術の起源を論じるには「労働起源説」＝「芸術の起源は労働である」という観点の導出の再検討が必要となっている。

二、「労働は美を創る」⁽²⁾は美学的観点であるか

「芸術の起源は労働である」という考え方はマルクス主義の観点と見なされており、マルクスとエンゲルスの基本的な命題に依る。基本的な命題とは、一つは「労働は美を創る」、もう一つは「労働は人間を創る」である。

「労働は美を創る」はマルクスの『経済学・哲学手稿』で提出された美学の命題だと見なされている。⁽³⁾その英文訳は「It produces beauty」である。しかし、この「produce」は「創る」「創造する」の意味ではなく、「生産」あるいは「製造」を意味している。また「beauty」は、抽象的な芸術の美を指すのではなく、生産された商品の美、美しい商品を指している。マルクスとエンゲルスが『経済学・哲学手稿』で討論したのはそもそも美の本質の問題ではなく、労働の異化問題 (estranged labor) である。つまり、生産と収穫との間に存在するパラドックスの問題である。労働者は資本家に多くの良いものを作り出すが、自分は貧困を得るのみである。労働者は宮殿を建てるが、自分は荒ら屋に住むしかない。労働者は美しいものを生産するが、その結果自分に障害をもたらす。労働者の労働成果は労働者の知恵を体現するが、彼らの労働は彼ら自身には利益をもたらさ

ない。これは労働者の愚と痴を述べているのではないか。しかし、労働者は賢いし、知恵を備える者である。マルクスはこれこそを労働異化と考える。誤訳の原因によって、「It produces beauty」の理解において誤解を招いたのは明らかである。その誤解は、以下の三つの方面に現れる。

第一に、「労働」の概念についてである。『経済学・哲学手稿』の文脈で「労働は美を創る」の「労働」(labor)を理解すると、それは労働者 (worker) 或いは労働者の具体的な労働を指す。例えば、部屋を建てることや、工業製品を創ることである。工人の労働は、人間の物質的な需要を満足することを目的としている。芸術家の芸術創造と同種類の労働ではなく、芸術的創造活動と関係はない。つまり、美学の範疇に属していない。第二に、「創造」の概念についてである。「労働は美を創造する」の「創造」(produce)とは「芸術創造」の意味ではなく、一般的な商品生産を意味する。言い換えれば、工人が機械などで行う生産活動を指す。したがって、「produce」は「生産する」と訳すべきであろう。芸術創造とは関わりがなく、「produce」も美学の範疇に属していないことが分かる。第三に、「美」の概念についてである。マルクスはここで「美」という語を使ったが、彼の本意は芸術美を指していない。「It produces beauty-but for the worker, deformity.」における「produce」の本意は製造であり、創造ではない。マルクスは労働の異化を強調している。つまり、労働は美しいものを生産し、美しい商品を製造するが、反して工人は生産によって障害者になる。明らかであるのは、マルク

スは労働を介して美と醜の問題を論じているのではなく、労働生産によって生じた労働異化の特徴を説明しようとしているのだ。

マルクスは特定の倫理的文脈で「美」を論述している。これはマルクスの資本主義社会異化事実に対する叙述と解説にほかならない。「労働は美を創る」の中国語訳を「芸術の起源は労働である」の前提として理解するのは適当ではないと思われる。

三、「労働は人間を創る」は文学的観点であるか

中国の文芸理論界では、「労働は人間を創る」と「労働は美を創る」とが緊密に繋がっており、「芸術の起源は労働である」のもう一つの前提だと理解されている。エンゲルスは、人類の進化過程を考察する論文「猿が人間化するにあたっての労働の役割」⁽¹⁴⁾においてはじめて「労働は人間を創る」という概念を提出した。「労働は人間を創る」は人類の起源を科学的に説明した観点だと考えられており、また人類の起源を理解する重要な根拠とされている。「芸術の起源は労働である」から芸術の起源を考察すると、芸術は一般的な実践活動から発展してきたものであり、労働は実践活動の重要な部分として芸術に基本的な内容を提供した。例えば、狩猟を表現する洞窟壁画は、芸術に基本的な形式を提供した。一部の石器が体现する均衡・対称・滑らかな外観もその例である。これらに基づいて、一部の文芸研究者は「芸術の起源は労働である」という主張を導いた。

文学芸術は、その起源からみると労働と緊密な関係をもっている。しかし、労働は人類の一種の実践活動として芸術の起源の条件であって、芸術の起源そのものではない。そして、労働はただ人類進化の外部条件の一つである。したがって、エンゲルスの論述である「労働は人間を創る」を、人間は労働によって創造されると理解してはいけないうし、また芸術の起源が労働であるという結論も導かれないだろう。

「猿が人間化するにあたっての労働の役割」は、エンゲルスの著作早期に書かれた論文であり、主に猿から人間へと進化する過程を考察している。その中では、特に労働が人類の進化過程で果たした役割を強調している。エンゲルスは、弁証法によって人間に対する労働の重要性を強調する。つまり、労働はすべての人類活動の主要的かつ基本的条件である。「労働は人間を創る」は特殊な文脈における労働と人間との関係についての論述であり、猿が労働によって人間に進化することに対する理論的な概括である。労働が人間の進化過程に重要な役割を果たすことを強調しているが、人間が労働によって創られることは強調していない。

この論文では、エンゲルスは主として猿がどのようにに人類に進化するかを検討した。労働が人間を進化させ、また人その他の動物とを区別する。エンゲルスの本意は、「芸術の起源は労働である」を論述するのではなく、人類進化の過程における労働の役割を説明しているのである。エンゲルスは人類の進化する過程において、二つの基本事実を客観的かつ科学的に説明し

ている。その一、人間は労働によって手の機能を完備し、労働は人間に器用な手をもたらした。その二、人間は器用な手を持つからこそ、魔法のように芸術を創りはじめた。

ここから見ると、エンゲルスは二つの問題を説明している。

一つは労働と手の関係であり、もう一つは手と芸術の関係である。手は労働の器官であるだけでなく、労働の産物であるというエンゲルスの論述は、労働によって猿の手が人間の手に進化したことを強調している。労働は人間の手の進化の必要条件であり、また器用な手は芸術を創造するための必要条件であるから、労働と芸術の間には必然的な論理的関係はない。したがって、「労働は人間を創る」という訳文から「芸術の起源は労働である」へと導くことは不適切である。

エンゲルスはこの論文で、労働を人類進化の根本的な原因だと考えている。彼は多くの事例をあげて分析し、猿の手、発音器官、脳は労働によって人の手、発音器官、脳に進化したことを指摘した。更に、猿の手が人間の手に進化したからこそ、芸術が人間の手によって創られたと言う。エンゲルスにとつて、人間の進化を促した労働と、人間の手によって創られる芸術活動は、異なる二つの方面である。絵画、彫刻、音楽などの芸術は人間の手によって作られたものであり、人間の手が高度に、かつ器用に発達した結果である。しかし、「労働は人間を創る。人間の主観世界を前に進めさせ、また、人間が世界を支配する方法を開拓し、世界を支配する芸術方式が生まれてきた。――これは彼が構築した芸術の起源についての輪郭である」⁽¹⁵⁾と主

張する学者もいる。簡潔にいうと、労働は人間を創り、そして芸術を創る。したがって、芸術の起源は労働だということである。

実は、エンゲルスは、文学の起源の問題ではなく、人類の文明がどのように進化してきたのかを検討している。進化によって人間が複雑な活動 (operations) をできるようになったことを指摘した。活動とは様々な「仕事」(the work) を指す。しかし、人間が従事している様々な活動 (operations) を人間の手によって行った労働 (labour) と理解するのは、エンゲルスの本意ではない。エンゲルスの論述では、「仕事」は労働と同じ概念ではない。エンゲルスは「労働」をいくつかの種類に分けている。

その一、手工労働を特徴とする活動である。例えば、狩猟、牧畜、紡糸、紡織、冶金、製陶業と航海などがある。その二、頭脳労働を特徴とする活動である。例えば、商業、工業、芸術と科学などがある。その三、より高級な活動である。例えば、政治、法律、宗教はこれに属する。

また、エンゲルスは人類の活動を二種類に分ける。一つは、肉体労働である。つまり、人間が道具を用いて手で製品を生産する労働である。もう一つは、頭脳活動である。例えば、科学、芸術、政治、法律、宗教などである。エンゲルスは、肉体労働を労働 (labour) と見做し、頭脳活動を仕事 (the work) と同一視した。ただし、仕事は製品を直接に生産する労働とは異なる。その区別は、人間は脳で社会を支配し、また脳で他者の手を支配し労働させる。つまり、脳は他者の手を支配して物質的生産を

行わせる。エンゲルスは、「労働は人間を創る」という観点を用いて、労働と人間進化との関係を強調した。人間がどのように猿から人間に進化したのかを探索しているが、芸術がどのように生まれたのかという問題を検討しているわけではない。したがって、「労働は人間を創る」は美学の問題ではなく、芸術の起源とも無関係であり、単に人類学の命題である。

四、労働は芸術の起源ならず

マルクスとエンゲルスは、労働はただの生存活動であり、その機能は人間の進化を促進することにあると主張する。したがって、労働は芸術の起源ではない。では、芸術はどのように生まれてきたのだろうか。高玉は『芸術起源の「動因論」への質疑』で、「芸術の最初の形態を確認することは非常に難しく、さらに言えば無理なことである。実物の材料も背景の材料もなく、頼りにできる思维方法と科学的な手段もない。われわれは『芸術』が何であるか確認できないから、最初の芸術の動機も確認できるわけではない。今日までの一切の研究成果は推測から得られたものばかりである」⁽¹⁶⁾と述べている。確かに、最初の芸術の証拠が見つからない限り、芸術の起源を検討するには主観的な推理しかありえない。

考古学者や人類学者は部分的に芸術の証拠だと思われるものを発見したが、一般的には研究者は芸術の発源をおおよそ三万・四万年前の旧石器時代晩期と見ている。既に見つけられた遺

物、例えば古代に描かれ保存されてきた洞窟壁画や、石、骨、象牙で作られた彫刻などが、最初の史前芸術作品と見られる。

そのほか、旧石器時代、或いはもっと古い時代に作られた、石で作られた道具や武器などもある。ただし、これらの石と骨で作られた道具及び陶器が芸術品であるかどうか、いまだ確認することはできない。これらが、鑑賞するために作られた芸術作品であるのか、または生活のために作られた生活道具であるか、判断しがたいのである。ギリシャの陶製の缶や中国の銅製の鼎など、今日われわれが貴重な芸術作品として保存しているものは、当時はただ普通の生活用品であっただろう。例えばこれらを最初の芸術作品と解釈しても、労働から生まれたもの、或いは労働過程で作られたものだとも判断しがたい。

人類は労働によって進化したあとをはじめて創造の能力を持ち、道具を製造し、芸術を創作できるようになったと、エンゲルスは強調している。労働が猿を人間に進化させ、だからこそ人間には創造の条件と能力を与えられた。例えば、器用な手と発達した脳髓などである。そこから、人間社会に社会芸術形態が生じ、芸術作品が創造されるようになった。言い換えれば、芸術作品は人間の創造能力の転換であり、労働の必然的な結果ではない。したがって、芸術の起源が労働であるとは言えない。エンゲルスは、道具を造る能力によって労働を二種類に分ける。一つは猿を人間に進化させる労働であり、もう一つは道具を作る労働である。前者は数十万年を経て、猿の脳髓が人間の脳髓に進化し、猿は人間になった。しかしエンゲルスは、労働は道

具を作ることから始まったと主張する。道具を作ることを経典的特徴とした最も古い労働は、狩猟と漁である。このような労働の中で、植物だけを食べる人間が肉をも食べるように変わって、肉には人体の新陳代謝に必要な要素が多く含まれており、人類の脳髓をますます速く完成させた。この時、人類の文明史に決定的な進歩が現れた。即ち、火の使用や動物の飼育などである。人類生活における需要がより増大し、新たな労働領域も拡大し、人類の労働が徐々に複雑化し、人類文明の歴史が始まった。エンゲルスの観点では、労働はすべての人類生活の基本條件である。労働によって猿は人類に進化し、人類は芸術を作る能力を獲得し、そして芸術を含む文明を創造することができたのである。

エンゲルスの論述では、労働は元々人類の活動の一部分にすぎない。それ自体は創造力を持たない。人類のみが創造力を備えている。労働の過程において、人間は労働の主体であり、労働は人間によって存在する。人間を離れると、労働は進められない。それゆえ、芸術の発生を検討する際には、人間という主体を離れてはならない。労働はただ芸術発生の一つの条件であり、芸術発生の根源ではない。例えば、作物を植えた後、ある人が感極まって豊作の祈りの歌を歌った。労働はこの歌に素材を提供し、感情を醸しているが、それにも関わらず、芸術としてのこの歌は歌唱家が歌ったもので、労働によって創造されたものではない。舞踊も同じである。労働の後、人々は快楽的な舞踊を踊った。この舞踊はその人たちの芸術活動であり、或い

は創造した芸術作品である。われわれは舞踊の起源が労働であるとは言えない。

人間と芸術の関係は「創る」と「創られる」関係である。「作る」と「作られる」関係は労働の関係のように見える。「芸術の起源は労働である」という必然的な結論を導くことはできない。「芸術の起源は労働である」という命題が論理的でないこと述べているのは、芸術作品は労働の必然的な産物ではないためである。芸術は具体的な芸術作品であり、抽象的な芸術観念ではない。古代の人類が生活のために行った具体的な生産労働は、特定の目的を持つている。例えば、狩猟と漁の目的は食べ物を獲得することで、牧畜の目的は食べ物と蓄えることである。これらの労働は人類の生産活動と緊密に繋がっており、またこれらの品物はすくなくとも当時は芸術作品ではなく、ただ生活上の必需品ではない。今日に芸術品として見なされるものは古代の祭祀に使う器物で、当時においてただ宗教活動のために作られたものであり、芸術品ではない。性質からいうと、これらの器物を生産する労働は、芸術創造活動ではない。これらの労働は、後の芸術創造に条件を提供することしかできない。芸術は猿が人類に進化した後で人類によって作られたものであり、人間の労働から生まれたものではない。芸術は人間だけの創造物であり、労働の産物ではない。したがって、「芸術の起源は労働である」という考え方はマルクスとエンゲルスの著作の誤読の結果である。

以上、マルクスとエンゲルスの「労働起源説」の再検討を通

して、文学の起源が労働ではないことを論証してきた。文学はどこから生まれてきたのか、また文学は道德の産物・倫理の芸術であるかについては、紙幅の都合上、別稿で論述することとする。

【注記】

- 1 詳細は、苗力田『アリストテレス全集』（巻九）中国人民大学出版社、一九九四年三月、六四一頁を参照されたい。本論文における引用は、すべて筆者が翻訳した。
- 2 詳細は、魯迅『へ芸術論』訳本序『魯迅文集』（巻一一）吉林文史出版社、二〇〇六年一月、五〇〜五二頁を参照。
- 3 シャーマニズムと表記されることもある。
- 4 阿部正路『行くは誰が夫』『日本歌謡研究』一九八九年十二月、一三〜一九頁。
- 5 詳細は、エンゲルス『折口信夫の文学発生論についてのノー——遡るよううで遡らない起源遡及』『滝川国文』二〇〇二年十二月、一一〜二四頁を参照。
- 6 魯迅『門外文談』『魯迅全集』（巻六）人民文学出版社、一九五八年、七五頁。
- 7 姜慶国『芸術の起源は労働である』への質疑『復旦大学学報』（社会科学版）一九八二年六月、五九〜六三頁。
- 8 姜慶国『芸術起源の歴史的なプロセス…『芸術の起源は労働である』への質疑二』『學術研究』一九八二年十二月、一〇三〜一〇七頁。
- 9 高玉『芸術起源『労働説』への再検討』『唐都学刊』二〇〇二年六月、八

六〜九一頁。

10 趙連元『文学理論の美学的解釈』昆仑出版社、二〇〇七年、五七五頁。

11 呂德申『マルクス主義文芸理論発展史』高等教育出版社、一九九〇年十月、七一頁。

12 「It produces beauty」の中国語訳は「劳动创造了美」で、日本語に訳せば「労働は美を創る」となる。中国語訳が誤訳だと論ずるため、「It produces beauty」を中国語訳からそのまま訳し、「労働は美を創る」と訳した。

13 詳細は、中共中央マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン著作編訳局『マルクス・エンゲルス全集』（巻42）人民出版社、一九七九年、九三頁を参照。日本語訳は、ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所『マルクス・エンゲルス全集』（巻40）大月書店、一九九六年十一月を参照。

14 詳細は、中共中央マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン著作編訳局『マルクス・エンゲルス選集』（巻3）人民出版社、一九七二年、五〇二〜五二五頁を参照。

15 姚文放『芸術の起源は労働である』は科学的な命題である『復旦大学学報』一九八三年十二月、九〇〜九三頁。

16 高玉『芸術起源の『動因論』への質疑』『東南大学学報』二〇〇四年六月、五〇〜五三頁。

【付記】

本論文は、中国国家社科基金重大プロジェクト「当代西方倫理批評文獻の整理・翻訳・研究」（19ZDA292）、2021-2022 年度中国浙江省高校重大人文社科政・計画項目「文学倫理學批評の学際的な言説システム構築——脳デクス

ト理論に基づく」(2023ON97) および浙江大学重要国家と区域研究プログラム (S20220211) の助成によるものである。

(中国・浙江大学外国語学院副研究員)